

市民公開シンポジウム

「歴史から学ぶ感染症への視点」-2

戦争と感染症

柳川 錬平

順天堂大学医史学研究室 協力研究員

ある感染症の流行が社会に影響を与えるほどの規模に拡大する過程においては、病原体の感染力が強いことはもとより、宿主となる集団の側についても、人口密度が高いこと、人流が活発であること、人々の免疫力が不十分であること、などが蔓延を促進する要因となる。大規模な戦闘集団が、しばしば劣悪な生活環境を強いられて免疫力を落としながら、それでも機動的に展開することを求められた過去の戦争においては、そうした宿主側の促進要因がいつもたやすく重なってしまうのは必然であった。そのため、古来より戦争が何らかの感染症によるアウトブレイクを伴い、時にはその帰趨にまで影響が及んだ事例も少なくない。

本シンポジウムにおいては、当事者の方々が生存されている可能性の低い3つの戦争を例に、戦争と感染症との関わりについて紹介する。

クリミア戦争(1853~1856)における英国陸軍では、開戦初期から戦傷死よりも病死が多い状況であった。とくに戦場から黒海を挟んで対岸にオスマン帝国軍の兵舎を接収して設置されていたスクタリ病院の死亡率は、他の陸軍病院より高かった。しかし、本国から派遣されたナイティンゲールを中心とする看護団や、衛生委員会から派遣されたジョン・サザーランドらの委員団による環境整備が奏功して、終戦までに病死者は激減した。スクタリでの経験を踏まえてナイティンゲールが考案した病院の建築様式は、19世紀後半から長きにわたって病院建築の標準として普及した。

わが国にとって維新後はじめての対外戦争となった日清戦争(1894~1895)で勝利を収めた直後には、世界に例を見ない空前絶後の大規模検疫が行われた。西南戦争(1877)で戦地からの帰還兵がコレラを国内各地に拡散させた苦い経験から、清国および朝鮮半島からの帰還兵に対する検疫を陸軍の所管で行うことが決定された。新たに臨時陸軍検疫部が編成され、後藤新平が事務官長として現場で陣頭指揮に当たった。瀬戸内海に浮かぶ3つの島(似島、彦島、桜島)に用地を確保し、わずか2か月ほどで臨時陸軍検疫所を新たに開設して運用を開始するという極めて困難かつ壮大な国家事業であったが、後藤の卓越したデザイン力および実行力は、少なからぬ犠牲を伴いながらもこれを完遂し、その後の感染拡大を軽減した。

第一次世界大戦(1914~1918)において、帝国海軍は英国からの要請に基づいて艦隊の海外派遣を決断し、地中海には第二特務艦隊(1917~1919)を派出した。第二特務艦隊は、地中海を航行する民間船舶等を、ドイツ海軍の無制限潜水艦攻撃から護衛する任務に当たった。しかし、大戦末期には所謂スペイン風邪(1918~1920)が蔓延し、地中海における第二特務艦隊の活動にも影響を及ぼした。

わずかに3例ながら、19・20世紀における戦争と感染症との関わりを振り返ることで、21世紀の感染症についての考察に資するところがあれば幸いである。

(本研究の一部は、厚生労働科学研究費補助金特別研究事業 JPMH20CA2046 および厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業 JPMH21HA2011 の助成を受けたものです。)